

# ねこと夫婦の生活

## ～町へのアプローチ～

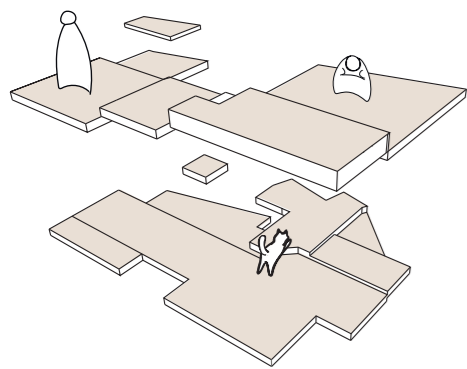
京都府京都市の鴨川沿いにある住宅地を敷地とした。京都府の地域の特徴である路地や小道に惹かれたい人は多くないだろう。童心や探求心が搾られる魅力ある地域である。この京都には、空き家に対する対策が多数ある。「町家の日」を制定され、町家を一般公開し、魅力を広める活動が行われていると知った。それらは人と町のコミュニケーションをゆらぎさせ、町へのアプローチとして優れているが、どうしても薄暗い路地や小道への不安は拭えない。また、一般公開されている町家を見つけずらい。街並みの観点から見ると利点だが、一般公開の観点からすると改善すべき点である。ここで公開する町家の目印になり、加えてコミュニケーションをさらに深める場を目指す。



### 01/ コンセプト

京町家までの道中で目印となる、安心感のある住宅を設計する。観光の人が気になる家とは、**小さな営みを行っている住宅**であると考えられる。住宅機能に、より手軽に・より頻りに接触することが考えられる**猫カフェ**の自営を加え、町への貢献とアプローチを両立して計画する。狭い道に人を留めることで、人のたまり場となり、コミュニケーションや活気が盛んになる。

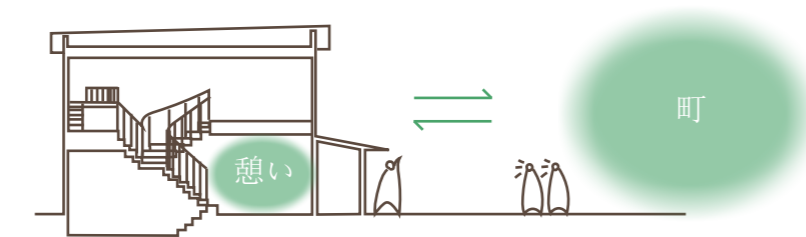
### 02/ 設計意図



人も猫も快適に過ごすことを目指す。猫に対して、キャットタワーを意識し、壁による区切りを少なくした。人に対しては、高低差により生活のエリアを分け、生活習慣の流れを整頓することができる。

### 03/ 町との繋がり

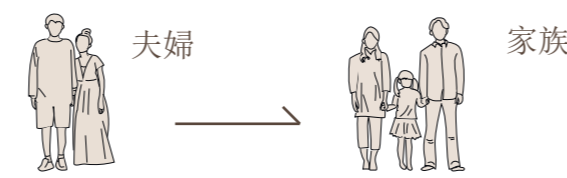
町との繋がりが方について、自分から内に招き入れる必要があると考えている。町への貢献を様々な家が行うことで町の活気やコミュニティが生まれ、1つの家から近隣の家へ、さらには町へと発展していくことができる。しかし**過去10年以上に渡って近隣との繋がりは停滞もしくは減少している**。社会構造の変化の影響が予想される。



現代、コミュニケーションツールは溢れかえっている。しかし孤独死や鬱は多発している。また物価高騰を協力して乗り越えていくため、町への一部開放が重要な鍵となると考える。今回は猫カフェを小規模に運営する住宅を設計することで、町に開放できる**思いのエリア**が生まれる。これにより、**町への貢献と近隣の支え合いに対して、アプローチができていく**。

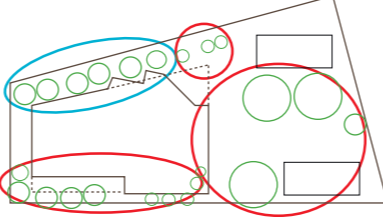
### 04/ 夫婦のこれから

夫婦の暮らしを計画する。20代後半が猫カフェを営む。ライフスタイルに合わせて、子供ができて対応できる住宅を目指す。



### 05/ 敷地の形を活かす

特徴的な敷地を縮小したような住宅を計画することで、隙間を生み、豊かな植栽に繋げる。**道路に面している部分は落葉樹、プライベート部分は常緑樹**とすることで、より華やかになる。

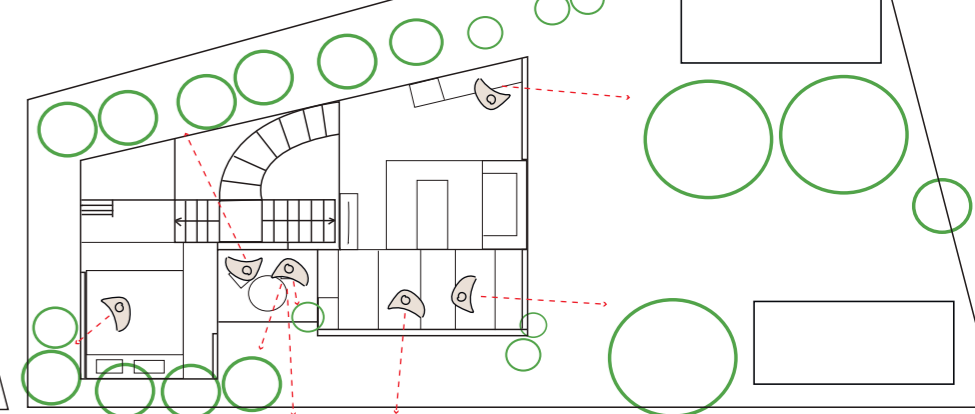


### 06/ 繋がる自然

1階から繋がる



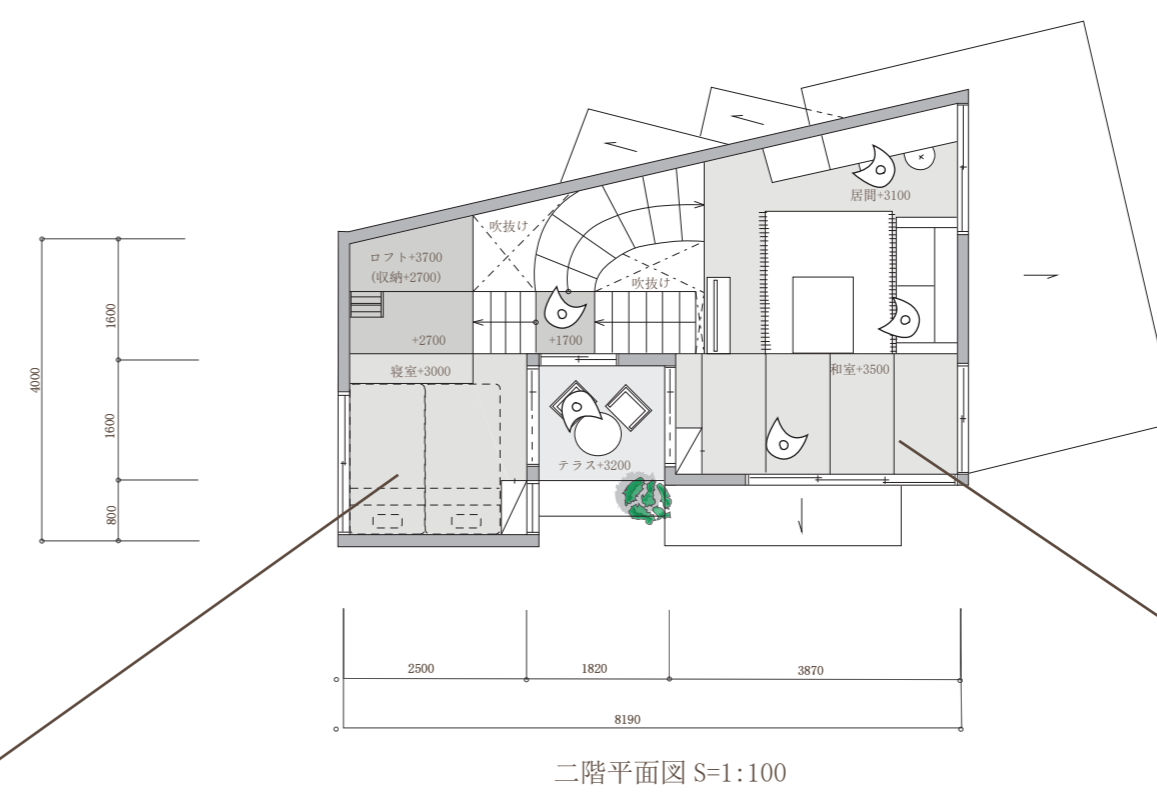
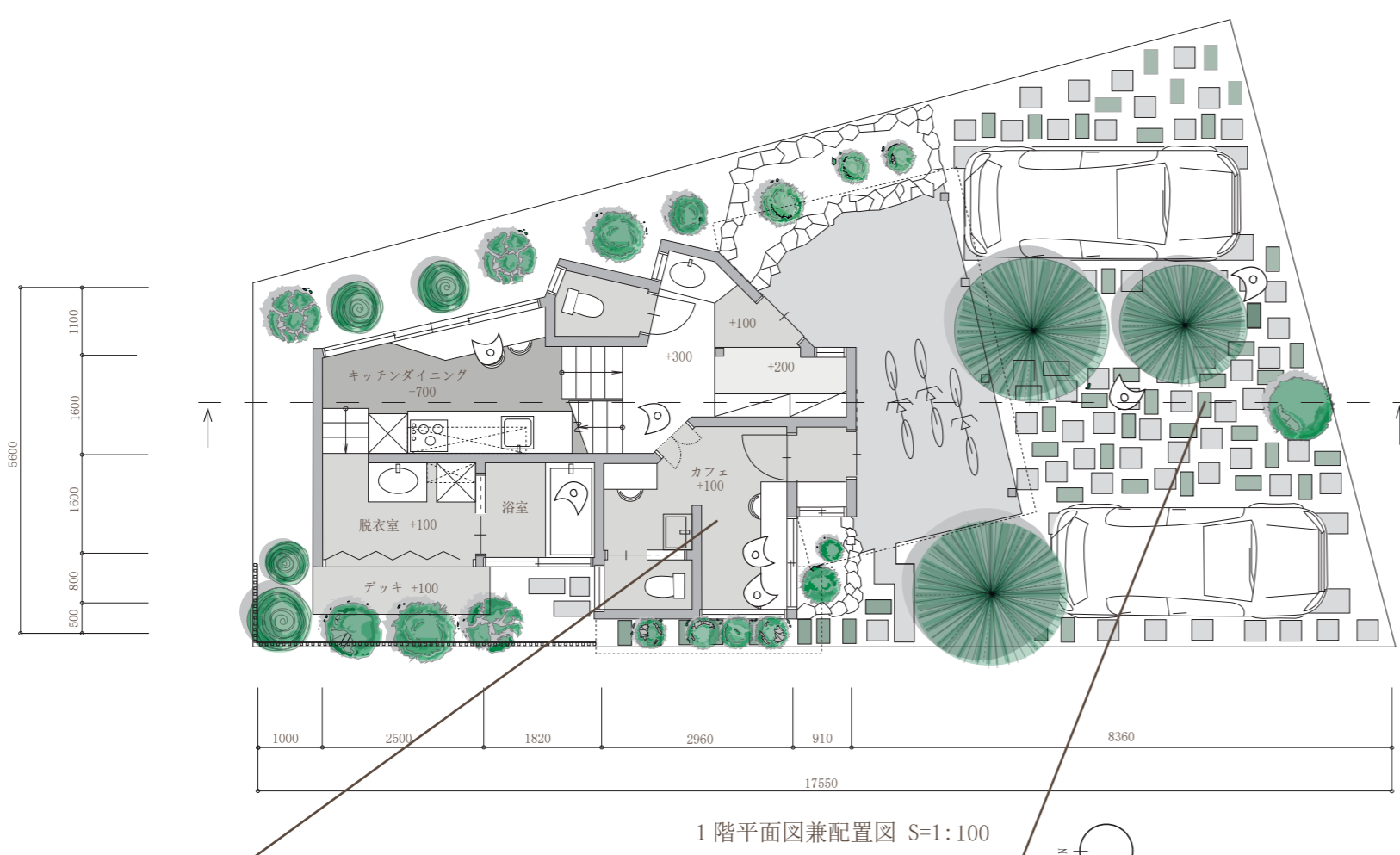
2階から繋がる



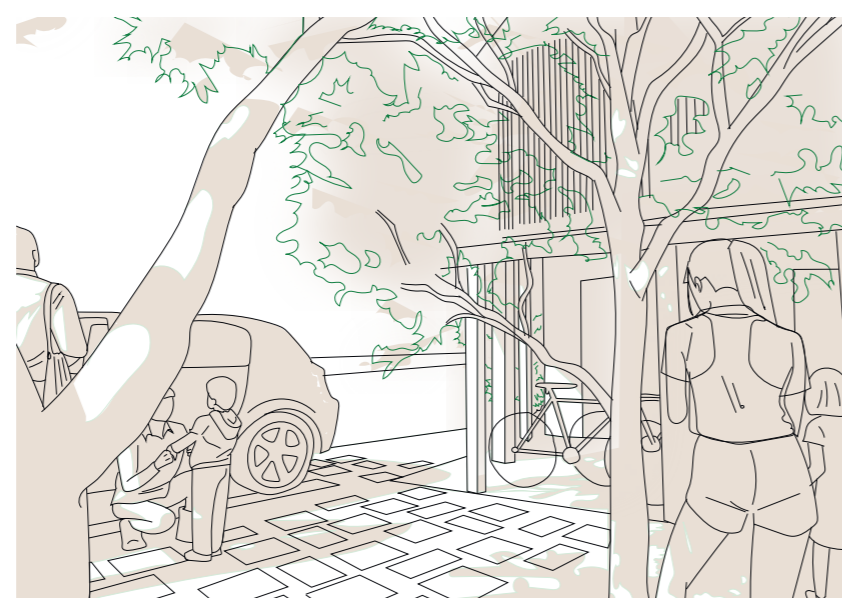
鴨川の手前に道路があることから、植栽による**緩やかな遮断**を行う。対して北側道路へ開けることで来客用動線が成り立つ。北側に長寿の樹木を設置することで、木の下をくぐる体験を楽しむ設計となる。また来客用便所の足元に(高さ)900×(幅)500の開口を計画し、落ち葉を楽しむことができる。

2階からは鴨川を眺めやすい設計を行う。主にテラスと和室から景観を楽しむことができる。同様に、植栽との繋がりも計画する。テラスの開口部からダイニングを通して植栽を眺めることができる。また、寝室の大きめの開口部からは日差しを防ぎつつ植栽を楽しむように考える。

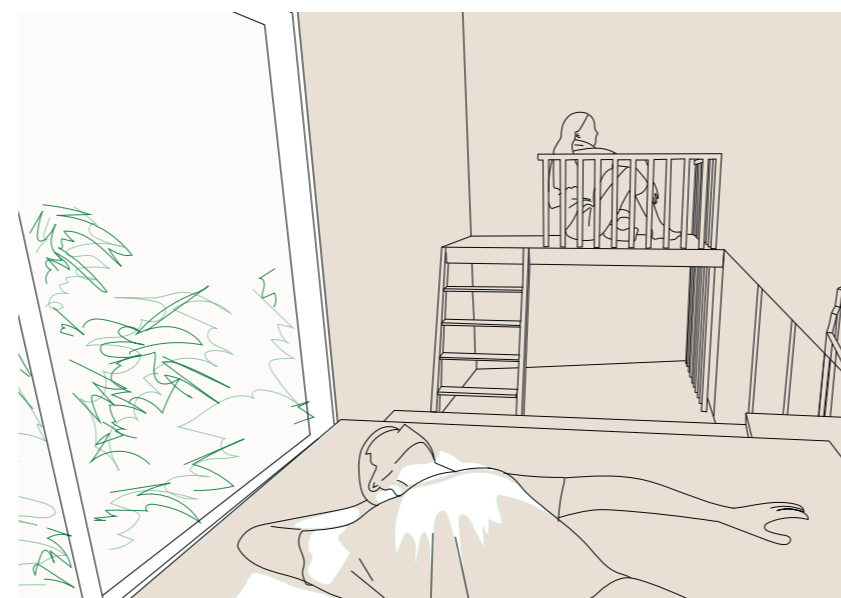
### 06/ 生活の計画



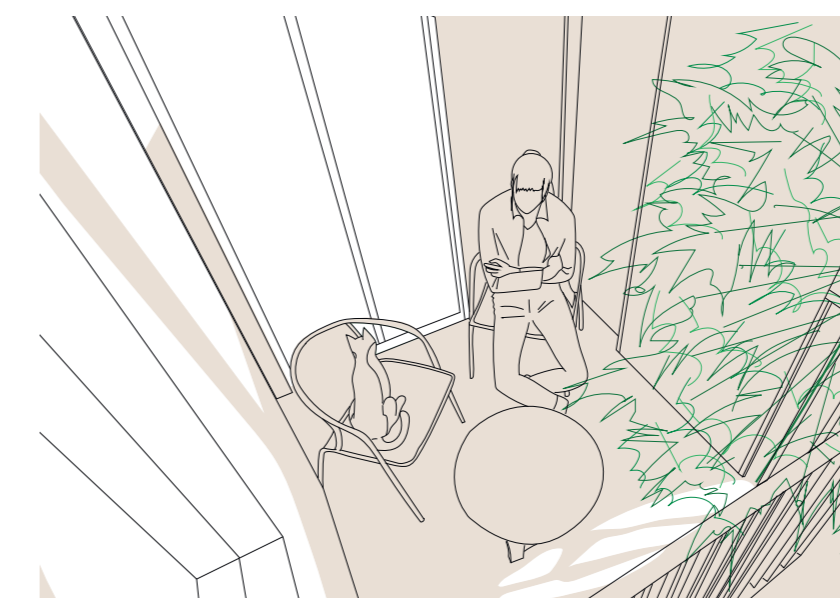
カフェエリアのバース。木漏れ日が暖かい。



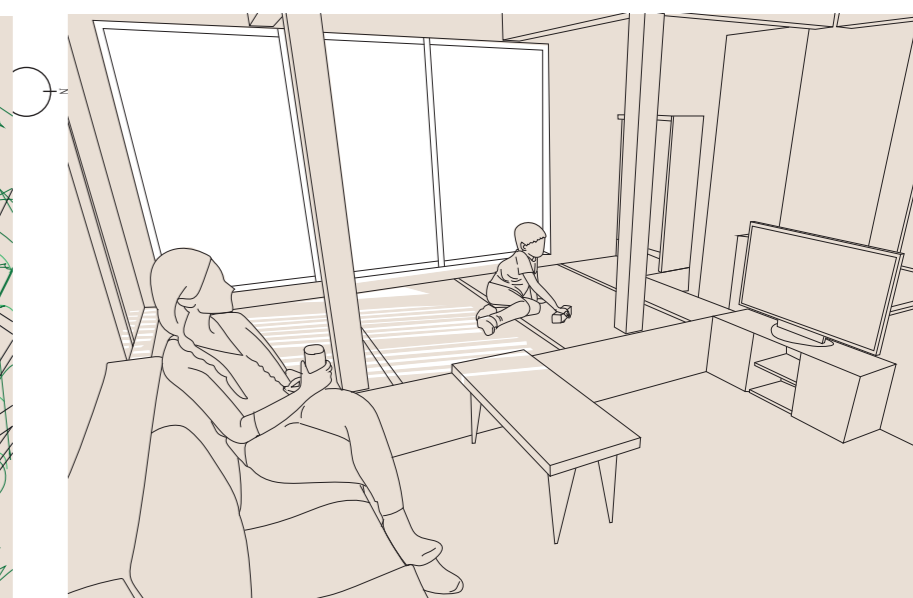
来客用兼家族用駐車場。木並びで自然の庇が形成されている。



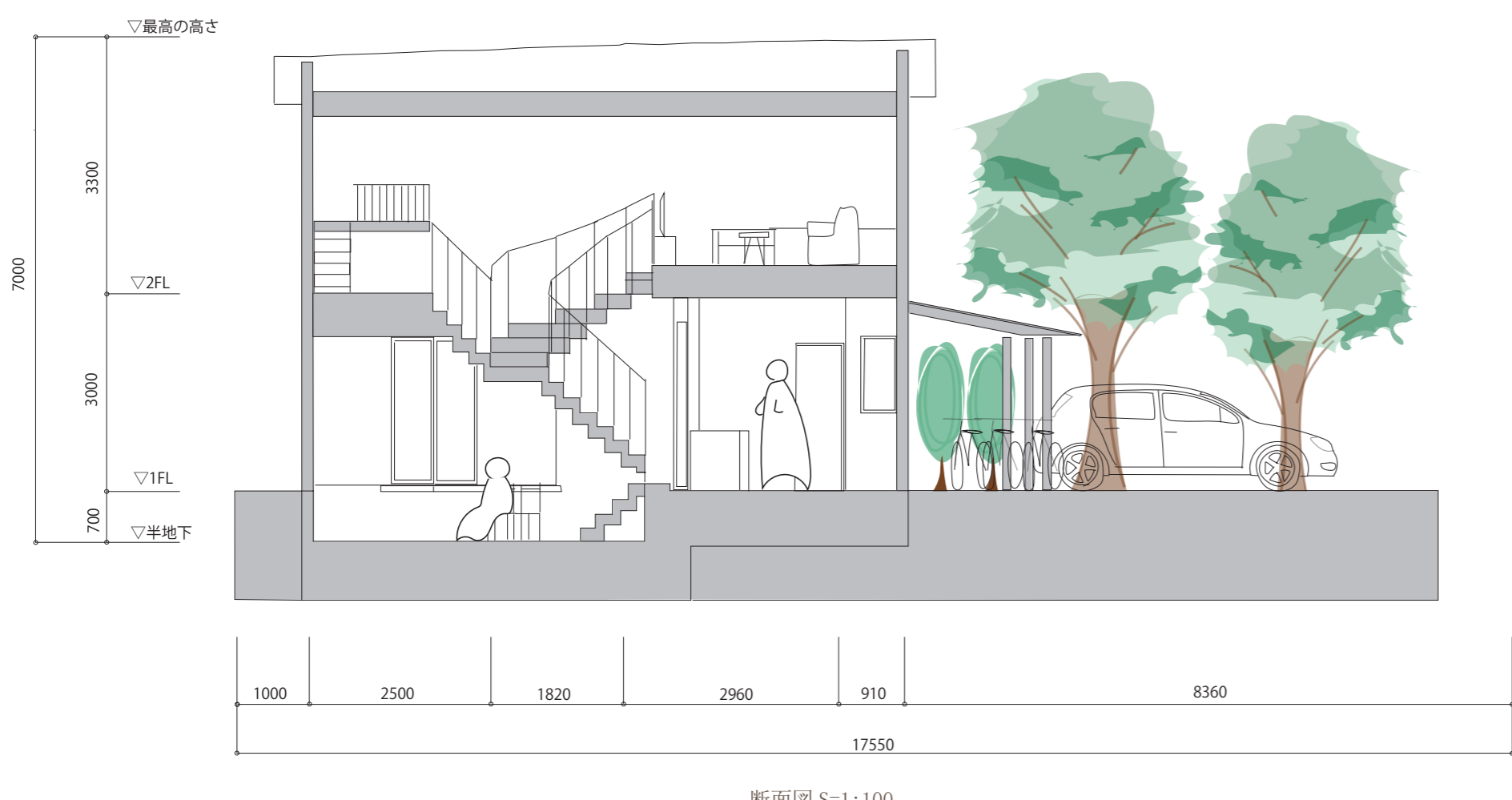
寝室とロフト(収納)のバース。日向と日陰が心地よい。



二階テラスのバース。目の前の植栽が町にも貢献。



居間エリアのバース。格子状の光が和ませる。



断面図 S:1:100



北側模型の写真。木々の色どりを町へ開放。



見下ろした模型の写真。美しい屋根が魅力。